

援助職のリカハリ

《17》

～「肩入れ」した支援後「肩抜き」できず「喪失」食らう～

袴田 洋子

2週間ほど前、今の仕事、ケアマネジャーを辞めようと思いました。職場の定例会議で、「ケアマネを辞めようと思っています」と、宣言しました。社内での人間関係に疲れ果てたのと、利用者さんの生活を「支える」というよりも「管理する」ように見える最近のケアプランのモデル書式に嫌悪感と虚無感を覚えて、「もう、辞めよう」と思いました。燃え尽き症候群という状態だったのかもしれませんが、16年やってきたのだから、十分じゃないか、ここらで一休みしてもいいじゃないか、と、自分を納得させる言葉が次々に頭に浮かんできました。そして、もともとの看護の道に戻って、専門職としての学びを深めていこうと、病院の求人に応募する気まんまんでした。しかし、ケアマネジャーを辞めるということは、担当している利用者さんを別のケアマネジャーに引き継いでもら

わなければなりません。これが、最も悩ましいことで、長い方だと介護保険のスタート当時からのお付き合いなので16年になっています。時間の長さに関わらず、本人と家族の間に生じる愛憎、葛藤を間近で見て、共に感じてきたと思っている私は、「その葛藤の土俵から、自分だけ降りられない」と思いました。そして、再び、独立開業して、自分だけの事務所で、自分らしくソーシャルワークの仕事をしようと思いました。何度も回り道をして、ようやくたどり着いた「ありのままの自分でよい」なのかなと思います。

《「尊厳死」の実現とは》

仕事をしながら通う専門職大学院の学生となった私は、ぼろぼろに疲れ果てながらも、同志が集う「居場所」を得られて、幸せな院生生活を送っていました。が、実践研究テーマとして

掲げた「尊厳死」の実現を目指す支援について、四苦八苦していました。本人が望んでいない延命治療をされないうために、エンディングノートを支援の中で使いたいと考えて、パイロットスタディとして、ゼミ仲間と指導教官にエンディングノートを書いてもらいました。しかし、「自分史」を冒頭に書くエンディングノートというのは、書くのに大変なエネルギーが要ることがわかり（自分もやってみてその大変さが初めてわかりました）、ノートを支援の中で使うことは断念しました。そして、エンディングノートではなく、終末期の医療について、自分の希望を記しておく「リビングウィル」を使ってみようと考えました。

《「支援」のためのリビングウィル》

ネットで、「リビングウィル」を検索すると、いろいろな「リビングウィル」がヒットしました。市町村で取り組んで作られたものもあり、超高齢化社会に突入した我が国では、終末期の医療をどう受けずにいられないですむか、意識が高まっていることが窺えました。そして、いくつかのリビングウィルを見て、回復が難しい状態になった時に、人工呼吸器を付けるか付けないか、心臓マッサージをするかしないか、人工透析をするかしないかなど、7～8項目の医療行為を希望するか

どうかの意思表示をしておくスタイルは、どれも同じように感じられました。似たようなそれらの書式を見ながら、なんとなく「医療サイドの保身のためのもの」のように思えてきてしまい、「自己決定を支援するもの」として、支援の場面で利用できるようには思えず、実践研究がうまく進められないことに焦ってきていました。

そんなところに、新津ふみ子先生の「経営実践」の講義で、ゲストスピーカーとしていらした宮崎のホームホスピス「かあさんの家」の市原美穂さんの話を聴き、宮崎市で作られたエンディングノートがあることを教えてもらいました。それは、宮崎市の医療、福祉、保健の専門職たちと行政が協働で作ったもので、終末期医療に対する希望のイエス・ノーを記入するだけでなく、「自分の思い」を自由に書くことができるスペースが作られていました。

《「家族」を丸ごと支援したいのだ》

そもそも、私が尊厳死の実現を目指す支援のために、エンディングノートやリビングウィルを使うことを考えた根底にあった動機は、本人と家族を丸ごと支援したいというものでした。本人と家族を分けずに、ひとつの「家族」「世帯」として支援する、ということです。これまで多様な「家族」に

出会い、介護が必要になった「親」と「子」のあいだに生じているさまざまな葛藤を目にしてきました。葛藤がありながらも、なんとか堪えて親の世話をする子（家族）の姿を、いつも自分と重なる想いで見ていました。そんな家族たちが抱える葛藤を少しでも減らせるような支援が、リビングウィルを使ってできないかと考えての実践研究テーマであり、終末期医療の希望について記入するだけでなく、普段、面と向かっては言えないこと、言い難いことを、リビングウィルの書面を介して、本人が家族に伝えたい「想い」を伝えるという支援をしたいと思います。

こうして、本人の想いを記入する「私が伝えたいこと」のページを挿入した袴田版オリジナルのリビングウィルを作成したところに、一人暮らしの末期がんの A さんのケアマネジメントを担当することになりました。

《在宅独居お看取りの支援》

A さんは、数年前に病気で妻を亡くしていて、比較的多い年金がありながらも、借金で自宅を売却したという、波乱万丈とも言えるような人生で、借金の返済のため、金銭管理等も含めた身の回りの世話をしていた息子さんは、「とんでもない奴だ」と A さんに対して激しく怒っているようでした。

70 代の A さんの病状の進行は早く、脊髄への転移がんで、あっという間に歩行ができなくなりました。一人暮らし、歩行ができない、末期がん、介護費用は極力抑えて、最期まで自宅にいる＝自宅でのお看取りという、地域でも前例のない実践事例となりました。

寝たきりになった A さんのお世話のために、1 日に 3 回、ヘルパーさんに入ってもらい、食事、洗濯、掃除、排泄、重度の床ずれのケア等、同居家族がいても大変な介護状態になるような状況でした。A さん宅は、通勤路にあったために、私は朝晩、A さん宅に立ち寄って、様子を見るのが日常になっていきました。病状が心配だったこともありますが、それよりも、あの部屋に一人でいるのかと思うと、立ち寄りにはいられませんでした。A さんは、自分のこれまでの生き方を「馬鹿なことをした。子ども達に本当に迷惑をかけた」といつも後悔の言葉を口にし、世話してくれている息子さんのことを褒めていました。私は、リビングウィルに、その A さんの言葉を書き留めて、息子さんに見てもらうなどをして、息子さんの怒りをなんとか減らすことができないかと、家族システムに役に立つことを意識し続けました。これほどまでに濃密な支援実践はしたことがなく、完全に「肩入れ」「逸脱の援助」をしていましたが、自

分がそのような実践をしてしまっている、と客観視できていればよい、とその時は、開き直っていました。が、感情労働といわれるこの仕事の難しさと、自分の未熟さが、そう簡単にはコトを終結させません。Aさんが亡くなった直後に、大学院の卒業の時期を迎え、加えて、アキレス腱の部分断裂をして人生初のギブス固定&松葉杖で、楽しみにしていた卒業旅行に行けず、私は重度の「喪失感」に襲われてしまいました。

《「肩入れ」したなら「肩抜き」》

寂しくて仕方なく、集中力を欠き、援助者としての自分の未熟さを痛感しました。「肩入れ」したのであれば、「肩抜き」を自在にできないといけません。プロ失格だな、と毎日、自分を責める日が続きました。

「親身になる」という表現は、支援の在り方を表す時に、よく耳にする言葉です。親身になりながらも、援助者が自身をセルフコントロールできなくて、たいへんな「スキル」のように思います。今月で、Aさんの支援が終了して1年が経ち、ようやく「過去」のことになってきました。Aさんの支援を振り返ってわかったことは、私自身の個人的な感情が相当に入り込んでいたということでした。自分の父親にできればしたい、と思っていること

を私はAさんにしていたと思うし、Aさんの不器用さが私自身の不器用さと重なって「肩入れ」したと思うし、息子さんの葛藤は、私自身の親に対して抱いている葛藤と重なっていたし、まあ、挙げればうじゃうじゃ出てきます。ちょー感情的な援助者で情けなくなります。もっとクールに仕事ができれば楽なのにな、と思いつつ、次も同じことをやらかしてしまうような気がしますが、もう二度とこんな思いはしたくないと思っています。「ありのままの自分」の支援と、戦略の支援は、同時進行が可能なのでしょうか。